

吉田城先生が夢に現れた……

北 原 ル ミ Rumi KITAHARA

吉田城先生が夢に現れた。フランス政府給費留学奨学試験の、あるはずのない第三次面接に、私は遅刻してしまったのだ。広い面接室におそろおそろ入ってゆくと、大変厳しい顔付きの先生が正面に腕を組んで座っておられ、私は竦んでしまった。他の審査員の方々がただ呆れたといった表情でざわめく中、吉田先生だけは独り沈黙し全身で怒っておられた。一旦約束された奨学金は打ち切りとの宣告がその場でなされたが、それすらも私の耳には遠く響いた。

この夢を見たのは、今から十年近く前になる。その前々日に頂いたお電話で、吉田先生は私の試験合格を大喜びに喜んで下さっていた。電話口で、いつもより少し早口になり、息継ぐまもなく一気に話された先生の声は、忘れられない。これほど感激して下さった先生に対して、結果を取り消すような遅刻とは、何ということ自分を自分ではしてしまっただろうかと、この悪夢のなかに結晶した申訳なさ、消え入りたさも、やはり忘れがたい。

先生は学生を褒めて勇気づけるのが上手でいらしたが、同時に現実の鋭い指摘も怠れなかった。博士課程に進学し、留学も決まってしまう頃、ある先生が次のようなことを示唆された。休学年度を少なくしてフランスから早々に戻り、こちらでまず課程博士号をとる、それから学術振興会のポスト・ドクター枠で科学研究費を申請した上で、通れば再度渡仏してテーズを書くという計画だ。目先の留学以外は展望の漠然としていた私は、なるほどそのような道筋もあるのかと思い、早速吉田先生にその計画を話してみた。自分も同意見だと言われた。そして付け加えられた。「ただし、中身がないとね」と。自分の安直さを悟るのに、これほど厳しく的確を射た言葉はなかった。博士論文を二本も書くためには、どれだけの集中力とどれだけの内容が必要か、私は考えてもみなかったのだった。先生は、つねにサラっとした言い方で容赦ない真実を抉られた。

吉田先生の姿を初めてお見かけしたのは、1990年度、京都大学教養部での「文学」という授業の場であり、私は一回生だった。火曜第二限のこの授業は、フランス文学に関して十人以上の先生方が一人二回ずつそれぞれのテーマで講義をされるリレー形式をとり、私がフランス文学専攻を志望したのも、その多彩さ・豊かさに引きつけられてのことだった。吉田先生は「文学と『食』」のタイトルで、12月18日と年をまたいで1月8日に講義をされたが、私は一回目

の方を欠席したらしく、手元に残るプリントは誰かの書き込みのあるコピーである。しかし、先生が紹介されたブリア＝サヴァランの『味覚の生理学』はよく覚えている。「文学」を自意識の葛藤としてしか読んでいなかった当時の私を驚かせたからだ。続いて配られたラブレー、フローベール、モーパッサン、ゾラ、プルーストの抜粋からも、通り過ぎてしまいそうな食事光景を「読む」可能性を教わった。とりわけアルベルチヌが詳細に語るアイスクリームの食べ方には、目が眩んだ。記憶にないのが残念だが、きっと先生は楽しそうにこの講義をされたろうと想像する。私の聞けなかった初回の授業では、レシピから記号論や文化人類学にいたるまでの「食」のエクリチュールについて、フランス料理の歴史的概観についてと、様々な要素を盛り込んで話されたようで、プリントを見るだけでも細やかな配慮や意気込みが伝わってくる。

先生御自身も、学生たちとのにぎやかな食事がお好きだった。第二限の授業が終わったお昼時の鈍く光る構内を、ぞろぞろと先生の後をついて多くの学生が百万遍や東一条の方に歩いていった。しかし私の印象に一番残っているのは、パリでの会食である。めずらしく夜だった。留学中の学生たちがパリの四隅から集まってきて、先生を中心にレストランの大テーブルを囲んだ。サン・ジェルマン・デ・プレの近くだったろうか。食事の後、もう大分遅かったと思うが、一旦解散しかけた時に、「ねえ、みんなまだ時間ある？ どこかでコーヒーでも飲まない？」と誘われた。京都では、お体のこともあって夜は切りのよい時間で引き上げられるのが常だったので、その名残惜しそうな口調は意外だった。どこかカフェのガラス張りのテラスへ入り、木枯らしの吹く夜の街路を眺めるように皆一列に並んで座った。「こうしていると、本当にいいねえ」だったか「パリはやっぱりいいねえ」だったか、先生が独り言のようにつぶやかれた様子は本当に幸せそうで、ふっと一時やすらいでおられるような表情が私の脳裏に刻まれている。

大変まめな性格でいらした吉田先生は、御自分の研究室から共同研究室へ、いつも忙しく往来されていた。講演会や研究会、時には食事会の案内ビラまで、パソコンを駆使されて実にカラフルな、字体もあれこれ凝ったものを、自ら作成され、「これ、ちょっと下に貼ってきてくれるかな」と学生に頼まれるのだった。アシスタントのようなことを私がさせていただいていた時には、携帯メールでのやり取りも多く、絵文字を使われるなど遊び心がおありだった。お菓子もプーチ・フルのような、華やかで気軽につまめるものがお好きだったように思う。様々な機会に「ちょっとケーキかなんか買ってきてくれませんか」とお使いに行かされたものだが、お客で来られる研究者の方にも、専攻ガイドン

スで話を聞きに来る二回生の学生にも、同じように気を遣われていた。

吉田先生は私たちの結婚保証人として署名までして下さった。意外な相手との突然の結婚話には目を大きく見開かれて「ええーっ」と叫ばれたが、夫と私の二人それぞれをこれだけ長く（夫は同僚として二十年、私は学生として十年以上）、近くで見てこられた方は他にいないから、とお願いしたところ、快くお引き受け下さったのだ。先生と同じ腎臓の障害を持つようになった独り身の彼を、内心案じていて下さったのだろう、「よかったよかった、これで安心だ」と大はしゃぎされつつ、私にもいろいろアドバイスを下さった。

もう一人の保証人だった父が結婚の翌年に亡くなった時には、大変心のこもったお悔やみのメールを頂き、胸を打たれた。様々なシンポジウムや講演会、研究会がひっきりなしで、とても忙しくされていた時である（私が名古屋へ移った2003年4月以降、先生から講演会関連などで頂いたメールは三十通にもなる）。御自身がお父上を亡くされた数年前のことが書かれていた。「やはり肉親の死は厳しい試練です」と。私の父は享年八十二歳だった。はるかにお若い先生御自身が急逝されたのは、その翌年だった。

吉田城先生の夢を今また見るとすれば、どのようなお顔で私の前に現れるだろうか。先生に約束しながらお渡しするにいたらなかった翻訳、論文等々のことがどっとひしめくように押し寄せてくる。私が京都をいよいよ出るとなった時に、「ちゃんと見ていますよ」と御自分の目の下を人差し指でトントンと叩かれたお顔が浮かんでくる。いつかまた、上機嫌のお顔を向けていただけるかどうかは、これからの自分次第なのだと心に言い聞かせる。

（きたはら・るみ 金城学院大学専任講師）